『大日経義釈』三部字輪観「二三同中位」説の考察

――「三部三処布字法」の追加検討を含めて――

真野　新也

一　はじめに

小稿は、善無畏（六三七～七三五）述、一行（六八三～七二七）筆受の『大日経義釈』（以下、『義釈』）字輪品に記され、善無畏が独自に創作した三部字輪観、特に「三部三処布字法」に連なる、「二三同中位」という問題がなぜ発生したかを、「十二真言王法」との関係から検討する。なお「字輪観」とは、「三部四処布字法」（以下、「四処布字法」）と「三部三処布字法」（以下、「三処布字法」）の総称とする。「四処布字法」という名称は『義釈』に記載される術語ではなく、類似する行法が、安然（八四一～八八九～、一説九一五没）の述作である『大日経供養持誦不同』や『観中院撰定事業灌頂具足支分』

（以下、『具支灌頂』）に存し、そこから借用した。「三処布字法」は、「四処布字法」に連続する行法であり、「四処布字法」を応用し、便宜上、創作したものとなる。

別稿において考究したことに基づき、その概要を示せば以下の通りとなる。そもそも「四処布字法」とは、観想における「内護摩」「灌頂」の後に位置づけられた修法で、「灌頂」によって獲得した「五字輪＝意生身」を「荘厳」するもので、師僧が自身と弟子の身体上において行う[1]。この場合、身体の四処（頭・喉・臍・足［臍以下］）に「阿・阿長・暗・悪」の四字、及び「娑字」「嚩字」の転じた字句を観想（布字）する[2]。これは「師資相承」を目的とし「秘密輪」とも呼ばれる。「三処布字法」とは、既に「四処布字法」を経た、行者自身の成道「因縁輪」を目的とする修法で、「四処布字法」で用いた「阿・阿長・暗・悪」の四字等を用いつつも、二番目と三番目の「阿引暗」（身体上では咽・臍）を合して身体上の三処「上位・中位・下位」の「中位」に布字する観法となる[3]。この特徴を言い表したものが「二三同中位」である。したがって、「三処布字法」と「二三同中位」説は、同義語と考えてもよい。

ここに「四処布字法」と「三処布字法」の大まかな意義を示したが、小稿は「三処布字法」、或いは「二三同中位」説に潜在する問題を考察するとともに、以前の考察で検討しきれなかった「三処布字法」についての問題も取り扱うこととなる。

二　問題の所在

「二三同中位」という術語自体は、法全（生没年不明）の『玄法寺儀軌』『青龍寺儀軌』[4]に初出があり、日本では、冒頭で言及した安然の述作となる密教事相書や、中世の事相書、さらに東密で著された末疏にも確認される[5]。「二三同中位」説の解釈は、成立の過程から『玄法寺儀軌』と『青龍寺儀軌』の間でも差異が見出され、日本においても諸説多種多様となっている。

先ずは、法全撰である『玄法寺儀軌』と『青龍寺儀軌』に基づき「二三同中位」説の問題の所在を確認したい。両書とも法全の編纂であることから、共通点が多くあることは言うまでもない。ただし、両書で言及される「二三同中位」説の位置づけには差異があり、その点に注目したい。

『玄法寺儀軌』

爾時薄伽梵、告二金剛手一言、有二遍一切処、甚深秘法門一。住二此字門一者、事業疾成就。宝冠挙二手印五股一、①身行輪布レ之。眉間・咽・心・臍。阿字至二娑賀一、右旋輪相接。初行果円寂、方便一切処。身外如二光焔一、伊等十二字、在レ外而散布。

曩莫三滿多沒馱喃阿。曩莫三滿多沒馱喃娑。曩莫三滿多嚩日羅二合赧嚩。迦佉誐伽。仰左磋惹。鄽壤吒

吒。拏荼拏多。他娜馱曩。跛頗摩婆。莽野羅攞嚩。捨灑娑賀。皆上聲短呼。曩莫三滿多沒馱喃阿引。曩莫三滿多沒馱喃娑引。曩莫三滿多嚩日羅二合赧嚩引。迦佉誐伽。仰左磋惹。鄽壤吒吒。拏荼拏多。他娜馱曩。波頗摩婆。莽野囉攞嚩。捨灑娑賀。次引聲長呼。右此一轉去聲呼之。（中略）

菩提心真言曰曩莫三滿多沒馱喃引冒引地阿

菩提行真言曰曩莫三滿多沒馱引喃引左哩也二合阿引

成菩提真言曰曩莫三滿多沒馱引喃引三冒引地暗

涅槃真言曰、曩莫三滿多沒馱引喃引涅嚩縛二合拏惡

《②曼荼羅三重、内金輪二三同中位、嚩字第三重、黄黄白色色、方便一切処。》（《　》内は割註）爾時金剛手、昇二於大日世尊身語意地一、法平等観一念未来衆生一。為レ断二一切疑一。③故説二大真言王（十二真言王）一曰、……[6]

傍線①は、所謂、「四処布字法」に相当する。『義釈』での身体箇所は「頭・咽・臍・足」であり『玄法寺儀軌』では「眉間・咽・心・臍」という違いはあるが、その後の「阿字至二娑賀一」や「身外如二光焔一、伊等十二字、在レ外而散布」という言説は『義釈』字輪品と同じである[7]。傍線①の後には『大日経』字輪品

所載の真言字句[8]が認められる。ただし、『大日経』とは異なり、その後に「菩提心真言」「菩提行真言」「成菩提真言」「涅槃真言」が「阿・阿引・暗・惡」の四字と関連付けられる。その後『玄法寺儀軌』の特徴として、傍線②のように割註において「二三同中位」説が示されるのである。しかし、この割註の係る範囲は不明瞭であるが、後述する安然は「涅槃真言」に係る割註と見做していたようである。そして最後に傍線③の「大真言王」つまり「十二真言王」へと次第する。

次に『青龍寺儀軌』を見れば、全体の流れは『玄法寺儀軌』と同じであるものの、二つの大きな違いが存している。一つは、『玄法寺儀軌』での「菩提心」から「涅槃」までの四つの真言が「阿・阿長・暗・惡」で結ばれるのに対して、『青龍寺儀軌』では斯様な対応が見出せない。もう一つは、傍線②の「二三同中位」の取り扱い、或いは位置づけが大きく異なっていることである。小稿においては傍線②に特に注目して考察したい。

『青龍寺儀軌』

爾時薄伽梵、告二金剛手一言、有三遍一切処、甚深秘法門一。住二此字門一者、事業疾成就。宝冠挙二手印五股一、①身行輪布レ之。眉間・咽・心・臍。阿字至二娑賀一、右旋輪相接。初行果円寂、方便一切処。身外如二光焔一、伊等十二字、在レ外而散布。

曩莫糝滿多沒馱喃引阿。曩莫糝滿多沒馱喃引娑。（中略）寂静涅槃真言曰、曩莫三滿多沒馱喃引涅囉嚩引拏惡弱搦諾莫娑嚩二合引賀引

（中略）「優陀那曰、真言者誠諦、図画漫荼羅、自身為大我。囉字浄諸垢安住瑜伽座。尋念諸如来、頂授諸弟子、阿字大空点。智者伝妙華、令散於自身。為説内所見、行人宗奉処。此最上壇故、応与三昧耶。」②漫荼羅三重、内金輪三中位、嚩字第三重、黄黄白色方便一切処。爾時金剛手、昇於大日世尊身語意地、法平等観念未来衆生。為断一切疑。③故説大真言王（十二真言王）曰住法界平等觀、……[9]

『青龍寺儀軌』の特徴として、傍線②は割註で記されることはなく、本文に含まれている。そしてなにより、ここでは『大日経』巻五、入秘密漫荼羅位品に説示のある優陀那（「　」内）を用いて、「二三（同）中位」による観法の教学的な位置づけを明記する。『義釈』で該当する巻一二、住秘密漫荼羅品では、「要当先自成就堪住瑜伽師位。（中略）用此灌頂之法而自灌灑、為除一切障速入仏会故也。前品名入秘密、今復云入者、此入是証入之入。」と記述される。上記の如く、「自灌頂」をもって「一切障」を除き、「仏会」に「証入」することは、後述の「十二真言王法」での言説に類似する[10]。いずれにせよ、このような記述の後に傍線③の「大真言王」すなわち「十二真言王法」が連なることは、行法

の重複とも推認できよう。

以上のように、『玄法寺儀軌』と『青龍寺儀軌』との間にさえ、「二三同中位」説の定義に少なからぬ違いが認められた。言うまでもなく、『玄法寺儀軌』や『青龍寺儀軌』は、日本密教の展開から見れば、かなり初期に記された文献となる。したがって、初期段階において生じた「二三同中位」説の解釈の小異は、密教特有の「意願」によって、日本においては大差、すなわち多様性が拡大していったのである。実例を挙げれば、やはり安然著述の事相書があり、当時の実状というものが反映されている。そこで、次に『具支灌頂』巻六を参考にして、日本での展開を少しく確認したい。

然於二三部四処布字一、対受三説不レ同。

一云、（中略）四処布字即是菩提心・菩提行・成菩提・入涅槃之義也。法全本涅槃真言註云、曼荼羅三重、内金輪二三同中位惡字第三重。黄黄白色黒色。方便一切処者、内者大日院黄色也。二三同中位者、第二第三院合為二第二重一。黄白色也。惡字第三重者、第四院黒色也。方便一切処者、遍在二四処一。方便惡字長声。（中略）此大日院説。又有云者、香志説二也。

二云、一・十・カ師二説。一云、（中略）観二布四処字一竟。第四輪終総誦二四種真言一。次以二羯磨印一於二身三分一観二布十二真言王字一。布竟七遍誦二真言一加二持四処一。（中略）此玄法寺法全阿闍梨説也。一云、

『大日経義釈』三部字輪観「二三同中位」説の考察　（真野）

（中略）此観中説也。

三云、同二前一師二説中第二説一。但以毎レ布二前額・咽・心三処字輪一、除二五五中各第五字及以伊等一十二字一、至二第四輪一始加二彼等一。仰等五字入二其次第一、伊等十二以布二身外一。別時説云、此説亦云、第四輪之時、当下布二第五方便輪字一以為中光焔上。別時口決、伊等光焔囲二遶主伴諸尊之外一。或想三囲二遶一一尊辺一亦並得也。此山王説。[12]

右記の三説から理解されるように、「二三同中位」説は、諸師によって異説が示されるばかりか、「二云、十師二説」の第一説のように、そもそも採用されない事例もあった。また、安然撰『胎蔵界大法対受記』巻六では、「三部三処布字法」に連なる「二三同中位」説は「第二四〇・四処輪布字」に記載され、「三処輪布字」という項目が作られることはなく、諸師の説を掲載するのみとなっている[13]。すなわち、安然の時代において「二三同中位」説は既に「四処布字法」の傍説に位置づけられたと言えよう。

紙幅の多くを問題の所在に費やしてしまったが、唐代中国や平安時代初期の密教界においても、それだけ解釈の多様性があったと言うことにもなる。そこで、本論では、この多岐に亙る解釈の源流となる『義釈』字輪品にある「三処布字法」に注目し、「二三同中位」説の位置づけが不安定となったそもそもの要因を考究していきたい。

三　三部三処布字法（二三同中位説）

冒頭で略説した通り、「三処布字法」は「四処布字法」に連続する布字法となる。両行法に共通することとして、『義釈』字輪品の導入部には「又此阿字有二五種一。阿・阿長・暗・噁・噁長。又毎二字輪一初先有下三重帰二命三宝一真言之心上。謂阿字・娑字・嚩字。即是顕二三部義一也。阿字是如来部。娑字是蓮華部。嚩字是金剛部。毎二三部一随二五字輪一而転随レ義相応也。[14]」と言及される。すなわち、「阿字・娑字・嚩字」のそれぞれの字句を「如来・蓮華・金剛」の胎蔵の三部を象徴するものとして、「五字輪」上で展開する旨が示される。ただし、最終的な布字法においては「阿字」の展開のみを用いる。その後に、身体の四支分（頭・咽・臍・臍以下）に真言字句（阿・阿長・暗・噁等）を観想する、所謂、「四処布字法」の実践法が説示される。「四処布字法」の詳説は別稿に譲り、今は簡単な説明に留める。左記の表は、別稿[15]での考察に基づいた、「四処布字法」と「三処布字法」の概要である。以下で、適時参照されたい。

行法名	① 三部四処布字法	② 三部三処布字法
輪・壇・漫荼羅	秘密輪・四重漫荼羅	因縁輪・三重漫荼羅
行法の目的・役割	師資相承・三事皆成	阿迦尼咤天成道（住業地住仏地）

行法名	① 三部四処布字法	② 三部三処布字法
観法の主体者	師僧が自身・弟子身を観じる	行者自身
三三昧耶[16]	第二・第三三昧耶	第一三昧耶
獲得する身体	意生身（五字輪）・法性身（差別智身）	自受用身・平等智身・持明之身
行位	地上・住上菩薩	如来地・一生補処菩薩
字句（頭～足）	阿、阿長、暗、噁	噁、（暗・阿長）、阿
色	白描	彩色

①【四処布字法】

然布字時当三分為二四分一。即是四重漫荼羅也。（中略）師既如レ是成身已、其漫荼羅亦如レ是布レ之。亦当下想二弟子一令中如レ是作上レ之。三事皆成是名二秘密漫荼羅一也。（中略）師以レ口相受。経所レ不レ説。[17]

ここでの注目すべき重要な点は、一つに「四処布字法」の成就が「師・漫荼羅・弟子」がそれぞれ漫荼羅として成就した状態、つまり師資相承が成立したことを示すことにあり、もう一つは、「四処布字法」は善無畏による口伝であり、『大日経』字輪品にその教示がないことに起因する。この二つの重要点は、本題の「三処布字法」にも関連した枢要な言説となるので、これを念頭に置き、「四処布字法」に続く「三処布字法」の実践法を確認したい。

②【三処布字法】

「四処布字法」に続き「三処布字法」が継続した行法として説示されている。一つの大きな違いは、やはり第二重と第三重が統合されていることにあり、続く文章で確認できる。なお、文中の（　）内で示した身体の名称は、「四処布字法」でのそれに準じる。

凡布二漫荼羅一亦為二三重一。第一重迦字乃至訶、周二匝内重一名為二金剛輪（臍以下）一也。此金剛輪持二一切法一猶二如世中金剛之輪持二於世界一也。即是行者最初菩提心、謂欲二堅固菩提心一故、先作二内重一也。次第二輪（臍・咽）。★謂二此是阿長及暗二輪一同二是中分一。…次第三輪（頭）用二嚩字輪一。亦従レ中如レ上布レ之令二環合一也。其伊等十二字在レ外散布。猶二如光焔一也。此即是三転法輪之義也。如レ是布已持誦者即成二持明之身一。猶二如大日如来神力加持等無一レ有レ異。此輪亦名二因縁輪一也。[18]

『大日経義釈』三部字輪観「二三三同中位」説の考察　（真野）

右の引用文において★傍線部の文章が「二三同中位」説の原型となる。要点となるのは、末尾に記述される「因縁輪」という語彙の定義が本来明示されていないことにある。このことは、後代に「二三同中位」説として、多様な解釈を生む理由の一つと言える。では、このような「三処布字法」の源流はどこに見出されるのであろうか。最も関連性が高いと推測されるのは、『義釈』巻三、具縁品二である。

今欲レ説二漫荼羅図位一、故還約二仏身上・中・下体一以部類分レ之。①自レ臍已下現二生身釈迦一示二同人法及三乗・六趣種種類形・色像・威儀・言音一。壇座各各殊異及其眷属展転不レ同。普於二八方一如二漫荼羅本位一次第而住。②自レ臍已上至レ咽出二現無量十住諸菩薩一。各持二三密一之身与無量眷属、普於二八方一如二漫荼羅本位一次第而住。②-□然此中自有二二重一。従レ心已下是持二大悲万行一十仏刹微塵諸大眷属。②-□従レ心以上是持二金剛密慧一十仏刹微塵諸内眷属。通名二大心衆一也。③従レ咽以上至二如来頂相一出二現四智・四三昧・果徳仏身一。即此八身於二一切世界中一、徒衆・刹土・名号・身業・諸受用事、皆悉不レ同。亦於二八方一如二漫荼羅本位一次第而住。[19]

右記の『義釈』具縁品二の文章は、「世尊一切支分皆悉出現如来之身」という経文に対する註釈となる。ここでは、仏身を「上・中・下」に三分とする。概略を示せば、①「臍以下」の支分を「生身釈迦」、②「臍～咽」を「十住諸菩薩」、③「咽～如来頂」を「果徳仏身」とする。ここで特筆すべき言説は「然此

中自有二二重一。従レ心已下是持二大悲万行一十仏刹微塵諸大眷属。②-㈡従レ心以上是持二金剛密慧一十仏刹微塵諸内眷属」と言及されるように、「臍～咽」に「二重・②-㈠（心～臍）・②-㈡（心～咽）」在りとされる。これ等の眷属が、②-㈠は「蓮華部」、②-㈡が「金剛部」を示唆していることは、容易に推測される。すなわち、『義釈』字輪品にある「三処布字法」は、これ等の「大悲万行大眷属」と「金剛密慧内眷属」とを、実践において身体の第二輪と第三輪とを中分に統合した観法、所謂、後代での「二三同中位」説と言えるのである。ただし、右の引用文で具体的な布字法が示されることはない。

このように、『義釈』字輪品所載の「三処布字法」は、『義釈』具縁品二の説示に関連、或いは基づく行法であると見做していいであろう。このことから、本来不明瞭である「三処布字法」の意義を指す「因縁輪」とは、「果徳仏身」であることも理解される。ただ、この「三処布字法」が経典で教示されることのない観法であり、善無畏の独自説であるにせよ、なぜ、後代において注目はされたものの、評価の定まらない、或いは傍説のような扱いになってしまったのか、そこに問題が残ると言えよう。恐らくは、次に引用する『大日経』巻五、秘密漫荼羅品の経文にその根源を見出すことが可能となる。

持金剛秘密主言、如レ是世尊、願楽欲レ聞。時薄伽梵以二偈頌一曰、①真言者円壇、先置二於自体一、自レ足而至レ臍、成二大金剛輪一。従レ此而至レ心、当三思二惟水輪一。水輪上火輪、火輪上風輪。次応下念二持地一、而図中衆形像上。爾時金剛手、昇二於大日世尊身・語・意地一、法平等観、念二彼未来衆生一。為レ断二一切

『大日経義釈』三部字輪観「二三同中位」説の考察　（真野）

疑一故、②説二大真言王一曰、「南麼三曼多勃馱喃一阿三忙引鉢多二合達摩馱覩三蘖登底孕反蘖哆喃三薩婆他引四暗引欠引暗噁五糝索六含鶴七嚂嚩八鑁嚩急呼九莎訶𠺕十嚂嚩訶囉二合鶴十一莎訶嚂嚩十二莎訶十三。」持金剛秘密主、説二此真言王一已。時三一切如来、住二十方世界一、各舒二右手一摩二執金剛頂一。（中略）三処流出、破二壊天魔軍衆一。次得二世尊身・語・意平等一。身量等同二虚空一、語意量亦如レ是。逮二得無辺智生一、於二一切法一自在而演二説法一。所謂此十二句、真言之王。仏子汝今現二証毘盧遮那世尊平等身語意一故、衆所二知識一同二於正遍知者一。[20]

この経文から、傍線①が「四処布字法」に連なることは、容易に理解されるものの、順序的に「三処布字法」に相当するものが、傍線②以降の「大真言王」すなわち「十二句」として示されている。そこで、傍線②に該当する言説を『義釈』巻一一、秘密漫荼羅品に見出し考えてみたい。

毘盧遮那世尊応正等覚坐二菩提座一観二十二字真言一。四魔降伏此法界現生三処出罪魔降者、謂大日如来坐二道場一時、平等観二於法界一而説二此十二句真言王一。即以二此力一能降二四魔一除二其罪垢一也。然四種魔中三魔無色。是仏於二阿迦尼咤天一時已降二伏之一。唯天魔有相。為レ欲レ令三世界中知二自在力一、故復於二此土一而現伏二天魔一也。三処者、謂如二上所一レ説、③仏身上分出二一切諸如来一、②中分従レ心至レ臍出二一切菩薩一。①下分従レ臍至レ足出二一切八部天神等一。皆従二如来平等三業一普門示二現大漫荼羅胎蔵荘厳

之位一。即是本尊真言及印也。当レ知仏従二於内証之徳一現二如レ是事一時、即時普伏二四魔一無レ有二遺余一。阿闍梨欲レ造二漫荼羅一時、亦須想三於自身一同二毘盧遮那一。[21]

さて、ここでの「三処」に関する言説を見るに、先程引用した『義釈』巻三、具縁品二と類似した内容が存し、したがって傍線に付した番号もそれに倣った。身体の「上・中・下」の分類に若干の違いはあるものの、具縁品二からの文章では「果徳仏身」、右記では「阿迦尼吒天」での「成道」となるので、両行法の意図するところは、同一であると考えることが出来る。表にまとめると以下の通りとなる。

支分	具縁品二「一切支分皆悉出現如来之身」	三部三処布字法	十二真言王法
上	如来頂相～咽・果徳仏身、出現四智	頭・第三輪	（頭）～心・一切諸如来
中	咽～臍・十住諸菩薩	咽・十輪	心～臍・一切菩薩
	咽～心・内眷属	咽～臍 二三同中位 第二輪	
	心～臍・大眷属	臍・十輪	
下	臍以下・生身釈迦	臍以下・金剛輪	臍～足・一切八部天神等

四　小結

以上を右の表に基づき総合的に勘案すると、「三処布字法」と「十二真言王法」は、共通して『義釈』具縁品二の文章である「世尊一切支分皆悉出現如来之身」という言説に関連することが確認された。「三処布字法」と「十二真言王法」を比較した場合、「三処布字法」の方が「二三同中位」説を含むため、より「内眷属」「外眷属」の間で「開・合」のある「世尊一切支分皆悉出現如来之身」の観想に則した観法が示されていると言える。つまり、「三処布字法」は『義釈』具縁品で教示される漫荼羅、すなわち「具縁品漫荼羅」[22]との一定の繋がりが見出されるのである。「十二真言王法」はと言えば、身体の三処に「（上分）一切諸如来・（中分）一切菩薩・（下分）一切八部天神等」が配されていて、これもまた、具縁品二のそれと大方で共通点を有しているが、下分の具縁品二では「生身釈迦」とは差異を示している。

では、なぜ「十二真言王法」を善無畏、一行以降の中国の密教僧、更には平安時代初期の日本の密教僧は選択したのであろうか。その理由は、やはり、「三処布字法」が善無畏の経典に基づくことのない独自説であるとともに、行法の目的たる「因縁輪」という語彙の定義が本来的に不明瞭なことに帰すと言える。一方、「十二真言王法」は『大日経』にも存する言説であり、『義釈』秘密漫荼羅品で行法の目的も明記されているため、後代の密教僧は「十二真言王法」を選択し、重用したものと考えられまいか。ただし、「三処布字法」或いは「二三同中位」説は、完全に捨て去られたということではなく、特に日本において、

傍説ではあるにせよ、中世迄の密教僧の間で引き継がれていたのである。

---

[1] 拙稿「『大日経義釈』・『大日経疏』における観法の一側面」『天台・真言　諸宗論攷』法蔵館、二〇一五。二六六～二七八頁。

[2] 拙稿「『大日経義釈』における胎蔵漫荼羅の意義」『大久保良峻先生古稀記念論文集　天台学と諸思想』法蔵館、二〇二五。を参照。

[3] 前掲、「『大日経義釈』における胎蔵漫荼羅の意義」を参照。

[4] 『玄法寺儀軌』（具名：『大毘盧遮那成仏神変加持教蓮華胎蔵悲生曼荼羅広大成就儀軌供養方便会』）、『青龍寺儀軌』（具名：『大毘盧遮那成仏神変加持教蓮華胎蔵菩提幢標幟普通真言蔵広大成就瑜伽』）

[5] 早くは円珍記『大悲蔵瑜伽記』（仏全二七・九五七頁下）、覚超撰『三密抄料簡』（大正七五・六五一頁）、皇慶述、長宴撰『四十帖決』（大正七五・八三三頁上～下）、承澄述『阿娑縛抄』（仏全三五・三五一頁上～三五三頁上）杲宝撰『大日経疏演奥鈔』（大正五九・一五頁中）等に認められる。ただし、『演奥鈔』は『三密抄料簡』の引用となっている。

[6] 大正一八・一二五頁上中。以降で真言字句を示す場合は、旧字体のママとする。

[7] 続天全・密教1、四九一頁上。

[8] 大正一八・三〇頁中、下。註14にこれらの真言の字句を示したので、そちらも参照。

[9] 大正一八・一五一頁上～一五二頁上。

[10] 拙稿「『大日経義釈』における胎蔵漫荼羅の意義」『大久保良峻先生古稀記念論文集　天台学と諸思想』法蔵館、二〇二五、では「十二真言王法②」と定義した。

[11] 安然撰述とされる『金剛界対法対受記』に頻出する「香志」については、大久保良峻師から『阿娑縛抄』（仏全四一・三三九頁上）に長意（八三六～九〇六）を示して「香志房・露地院」という記述があることをご指摘いただいた。『天台座主記』（群書類従、第三揖、巻五七、六二五頁）には、長意を示して「露地房」とあるが、この違いについては不明。

[12] 大正七五・二七二頁下～二七三頁中

[13] 大正七五・九三頁上～九七頁中。参考までに、ここには台密で有名な『瑜祇経』の「阿闍梨位真言」についての言及も最末尾に認められる。

[14] 続天全・密教1、四八六頁下。参考までに、『大日経』巻五、字輪品（大正一八・三〇頁中、下）に説示される真言字句は以下の通りとなる。

爾時薄伽梵毘盧遮那、告二持金剛秘密主一言、諦聴秘密主、有二遍一切処法門一、秘密主若菩薩住二此字門一、一切事業皆悉成就。

南麽三曼多勃馱喃阿　南麽三曼多勃馱喃娑　南麽三曼多伐折囉二合赧囀

迦佉哦伽　遮車若社　吒咤拏荼　多他娜馱　波頗麽婆　野囉邏囀　奢沙娑訶　吃灑二合右此一轉皆上聲

短呼之

南麽三曼多勃馱喃阿　南麽三曼多勃馱喃娑　南麽三曼多伐折囉赧囀

迦佉誐伽　遮車惹社　吒咤拏荼　多他娜馱　波頗麽婆　野囉邏囀　奢沙娑訶　吃灑二合右此一轉皆去聲

長呼之

南麽三曼多勃馱喃暗　南麽三曼多勃馱喃糝　南麽三曼多伐折囉赧鑁

劍欠儼儉　占襜染瞻　黏喃喃湛　擔探腩淡　唼呫囃嚩　閻嚂藍囃　睒衫參頷　吃衫二合其口邊字皆帶第

一轉本音呼之

南麽三曼多勃馱喃嗯　南麽三曼多勃馱喃索　南麽三曼多伐折囉赧莫

孱却虐噱　灼綽弱杓　磔坼搦擇　咀託諾鐸　博泊漠簿　藥嚩落嗼　鑠嗦索臛　吃索二合皆帶第一轉音入

聲呼之

伊・縊・塢・烏　哩・嚦・里・狸　翳・藹・汗・奧（伊等十二字）

仰壤孥曩莽　喚髯喃南鑁　嘘弱搦諾莫

[15] 拙稿「『大日経義釈』における胎蔵漫荼羅の意義」『大久保良峻先生古稀記念論文集　天台学と諸思想』法蔵館、二〇二五、を参照。

[16] 続天全・密教1・二四六頁下～二四七頁上。「第一三昧耶」初三昧耶故得レ同二如来秘密身口意平等之身一。初三昧耶為二自受用一故。初三昧耶為三建二立大悲胎蔵漫荼羅一故。初三昧耶為三加二持如来眷属一故。「第二三昧耶」第二三昧耶故得レ同二如来加持法界宮尊特之身一。第二三昧耶為三成二就法性身諸菩薩一故。第二三昧耶為レ作二毘盧遮那阿闍梨事業一故。第二三昧耶為加二持蓮華眷属一故。「第三三昧耶」第三三昧耶故令三此身土皆如二金剛一与二無量持金剛衆一而自囲繞。第三三昧耶為四折二伏摂二受随類衆生一故。第三三昧耶為二執金剛弟子事業一故。第三三昧耶為三加二持金剛眷属一故。

[17] 続天全・密教1、四九一頁上。また、この行法が「中胎蔵」を含めた四重漫荼羅であり、師資相承の「秘密輪」であることは、下記の『義釈』巻六、具縁品二之四（続天全・密教1、二二三頁下～二二四頁上）の文章からも是認される。ただし、ここでは「暗字観」つまり「百光遍照王観」を用いていることが違いとなる。「阿闍梨復当下頂二礼漫荼羅一切諸尊一為二灌頂一故至誠啓白上。即持二宝瓶一徐遶二漫荼羅一三匝已復更如法加持。至二弟子所一先用二囉字一為レ火、焚二焼其身一悉成レ灰已方用二四瓶一次第灌レ之。灌已観三此灰中作二嚩字門一。其色純白。従レ此出二生五字一。所謂阿・鑁・嚩・吽・欠持二其五輪一。①次

観二暗字一在二其頂上一。転成二中胎蔵一。又従二此字一生二三重光焔一。②一重遍遶二咽上一随下所二照及一之処上、諸尊隨現即成二②第一重漫荼羅一。③次一重光遍遶二心上一諸尊随現成二③第二重漫荼羅一。④次一重光遍遶二臍上一。諸尊隨現成二④第三重漫荼羅一。爾時弟子都成二漫荼羅身一。」

18 続天全・密教1、四九一頁下～四九二頁上。

19 続天全・密教1、八五頁上下。

20 大正一八・三一頁上中。参考までに『摂大儀軌』巻三の該当箇所を確認すると。以下の通りとなる。

爾時金剛手、昇二於大日尊身語意地一、法平等観二察彼未来諸衆生一、説二大真言王羯磨印一口授。真言曰、「曩莫三滿多沒馱喃一阿三麽波多二合達磨馱覩二誐底孕二合誐多南三薩嚩他引四暗引欠暗惡五糝索六哈鶴七嚂嚩八鑁嚩急呼之九娑嚩二合賀引十心真言吽嚂嚩賀羅二合鶴娑嚩二合賀十一心中心嚂嚩娑嚩二合賀引十二。」纔説二真言一已、一切諸如来、往二於十方界一、各舒二右手臂一、摩レ頂称二善哉一。仏子汝今已、超二昇大日尊、身語意地行一、説二此真言王一。何以故仏子、毘盧遮那仏、応正等覚者。本坐二菩提座一、観二十二句法一、降二伏於四魔一、於二此法界一生、二三処流出句一、破二壊天魔軍一、逮二得無辺智一、自在而二説法一。汝今亦如レ是、同二於正遍知一、為衆所二知識一。汝問二一切智、大日正覚尊、最勝真言行一。

21 続天全・密教1、五〇二頁。

[22] 『義釈』具縁品で説示される、所謂、「具縁品漫荼羅」については、拙稿『『大日経義釈』における胎蔵漫荼羅の意義」『大久保良峻先生古稀記念論文集　天台学と諸思想』法蔵館、二〇二五、を参照。